

聖書箇所：ルカの福音書7章36～50節

説教題：信仰があなたを救ったのです

## 1 シモン

### (1) イエスを招いた理由

今日の箇所には、パリサイ人であるシモンがイエスを食事の席に招待したとあります。しかし、パリサイ人がイエスを食事に招くなど、本来まったく考えられないことでした。その理由は、ひとつ前の35節を見るとわかります。人々はイエスを「食いしんぼうの大酒飲み、取税人や罪人の仲間だ」と非難していました。絶対に罪人いっしょに食事をしてはならない。パリサイ人は常日頃そう教えていました。しかしイエスはそんなことなど無視して、むしろ進んで罪人と呼ばれる人たちと食事をしていました。当然、パリサイ人はイエスをよく思うはずはありません。それなのにどうしてパリサイ人シモンはわざわざイエスを食事に招いたのか。ある目的がありました。

### (2) 招かれざる客

食事の準備は順調に進んでいきました。しかし、途中から思いがけない事件が持ち上がりました。その町でも有名なひとりの罪深い女が突然、部屋に入り込んできたのです。おそらく、身体を売っていたそんな女性であったのでしょう。罪深い女と思われていたのですから、当然シモンは、「ここから出て行け」としかりつけて追い出すべきところですが、ところがシモンは黙っているばかりで何も言いません。不思議に思われるかもしれません。理由があります。

日本でもそうですが、二千年前のイスラエ

ルには、家に招いたゲストは大切に扱わなければならないという習慣がありました。どこまで大切にされたのか。その事がよくわかる例が創世記19章にあります。ソドムの町に住むロトがふたりの御使いを家にゲストとして招く場面が出て来ます。ロトがゲストのいのちを守るために、自分のふたりの娘を町の男たちに差しだそうとしたと書かれています。私たちはそれを読んで驚きます。ゲストはそこまで大切にされるということです。

シモンは、ゲストであるイエスを大切に扱わなければならないという義務があります。何をするにもイエスを差し置くことがはまません。イエスが黙ってこの女性のことを受け入れている限り、シモンは黙るしかありません。しかし心の中は穏やかではありません。こんなことを考えます。39節。「この方がもし預言者なら、自分にさわっている女がだれで、どんな女であるか知っておられるはずだ。この女は罪深い者なのだから。」

人々はイエスを見て、「もしかしてこの方は預言者ではないだろうか」と噂しておりました。本当かどうかはわかりません。でも、そのことを確認する絶好のチャンスが目の前に転がってきました。「イエスが本当に預言者であるなら、この女がどんなに罪深い者であるのかすぐに見抜くはずだ。そしてこの女性をしかりつけ、家から追い出すはずだ。ところがイエスはそうしようとしません。イエスは何も気がついていない。絶対、こいつは預言者ではない。」シモンはこのように結論づけます。そして、このことを種にしてイエ

スを窮地に追いやることができると計算し始めます。

## 2 罪深い女

さて次にシモンからこのひとりの女に目を留めてみましょう。呼ばれてもいないこの女性がどうしてシモンの家を訪ねてきたのか。その事情について聖書にはこう書かれています。37節。「イエスがパリサイ人の家で食卓についておられることを知り。」

イエスに関心がなかったなら、イエスがどこの家に行こうか何をしようか自分とは関係ありません。しかしこの女性は違います。イエスが今どこにおられるのかが気になりました。イエスがこの町に滞在している間になんとかお会いしたいと思っていました。でも自分の立場を考えれば、そんな機会はないかもしれない。あきらめかけていました。

この女性が、どうしてイエスに関心を持つようになったのか。おそらくそれは人々がしている噂を来たのがきっかけであったと思われる。「イエスは食いしんぼうの大酒飲み、取税人や罪人の仲間だ。」イエスは、当時罪人と見なされていたこんな汚い身分の女性たちとも一緒に食事をされ、喜んでくださった。

それまで、人々は誰ひとり自分を温かく迎えることはありませんでした。むしろ、汚いものを見るようにして冷たいさげすみの視線を浴びせるばかり。そしてこう言うのです。「おまえは罪深い女だ。神はおまえを見て怒り、決しておまえを救うことはない。」

自分たちの味方となり、理解してくる者はひとりもいない。しかし、イエスという方だけはまったく違う。差別することなく、無条件で私たちのような者さえをも迎えてくだ

さる。いったいこの方はどんな方なのか。一度会ってみたい。そして話を聞いてみたい。

自分の家からシモンの家まではそれほど遠くはない。会えるかどうかはわからないけれど、とにかく行ってみよう。そのようにして、この女性はイエスの所にやってきました。

家の中はごった返しています。頭や顔をベールでおおっていましたが、この女性が来たことに気がつく者はいません。そんなふうにして最初は少し離れたところからイエスを見ておりました。

イエスは食卓の席に着いています。イエスをゲストとして迎えたシモンは、当然これからゲストを迎えるためのいろいろな儀式をするはずだと思っていました。何のことかという、イエスが44節から46節あたりで語っていることです。シモンは本来ゲストの足を洗うべきだったのです。ゲストに口づけをしなければならぬ。ゲストの頭に油を塗るべきでした。しかしいつまでたってもシモンはそんなことをする気配がありません。これはどういうことか。わざとシモンはしないのです。そうやってイエスに恥をかかせているのです。食事の席に一緒にいたシモンの仲間達は、にやにやしていたでしょう。ざまあみると自分たちの勝利を喜んでいたはずです。

この女性は、そんな光景を見て次第にいても立ってられなくなります。自分がこの世界でただひとり見つけた、自分を無条件で迎えてくださる方が、目の前でこんな扱いを受け、侮辱されています。

最初はどうか迷いました。でもいつまでも人々から隠れてイエスのことを見ているわけにはいかない。私の手には香油の入ったつぼがある。シモンがしないのなら、私が代わりにやる。人々から侮辱されている

ことは慣れている。「出て行け」と怒鳴られるかもしれない。でも、そんなことはもうどうでもよい。イエスのそばに近づきたい。でも私は罪深いものだから、真正面から行くことはできない。せめて、イエスの後ろならば。

そのようにしてこの女性はイエス後ろ側から足もとに立ちます。足を洗う水はありませんでした。でも、この女性の涙を水の代わりして、足を洗います。罪深い者が、真正面からイエスの顔に口づけすることはできません。せめて足にでもと、御足に口づけをし、香油を塗ります。

それがこの女性のしたことのすべてでした。

### 3 よけい赦された者が

イエスは、シモンの中にある考えを読み取られ、シモンに対しひとつのたとえ話を語ります。41, 42 節。「ある金貸しから、ふたりの者が金を借りていた。ひとりには五百デナリ、ほかのひとりには五十デナリ借りていた。彼らは返すことができなかつたので、金貸しはふたりとも赦してやった。では、ふたりのうちどちらがよけいに金貸しを愛するようになるでしょうか。」

シモンは答えます。「よけいに赦してもらったほうだと思います。」借りていた金額が大きければ大きいほど、もう返さなくても良いですよと言われれば、それだけ感謝も大きくなります。シモンでなくても、シモンの答は正しいと感ずります。そこまではよい。問題はここからです。ではいったい誰がよけいに赦された者であり、よけいに金貸しを愛する者となるのか。

イエスはこの女性のほうに顔を向けます。そしてこの女性が何をしてくれたのか。それ

に対して、シモンは何をしなかつたのか。一つ一つつきあわせながら、確認していきます。44, 45, 46 節。「この女を見ましたか。わたしがこの家に入って来たとき、あなたは足を洗う水をくれなかつたが、この女は、涙でわたしの足をぬらし、髪の毛でぬぐってくれました。あなたは、口づけしてくれなかつたが、この女は、わたしが入って来たときから足に口づけしてやめませんでした。あなたは、わたしの頭に油を塗ってくれなかつたが、この女は、わたしの足に香油を塗ってくれました。」

シモンはわざとイエスに足を洗う水も出しません。口づけもしなければ、頭に油も塗らない。イエスに対し、このような侮辱的な扱いをしてもかまわないと思っています。このたとえで言えば、シモンはイエスに対してひとつも借金などしていないと思っています。自分は神の前に正しく歩んでいる者であつて、きよいものである。罪を赦される必要などなにもない。

しかし一方、この女性は違います。どんな事情であれ、家が貧しかったせいであつたにせよ、自分が今就いている職業が神の前に正しいものであるとは思っていません。自分が汚れていることは自分自身が痛いほどわかるのです。でも、どうしようもない。どうしたらいいのかもわからない。そんなふうにならずと苦しんできました。このたとえ話で言えば、金貸しからたくさん借金をして返せない状態なのです。だから、こんな自分でも受けとめてくれる方がいると知つたとき、何かこの方に救いがあるのではないかと思ひました。だから、わざわざ危険を冒してやって来たのです。イエスを間近に見ただけではわかりませんでした。

しかし、侮辱されているイエスを見かねて、イエスの後ろにかけよったときのことです。涙を流しながら御足を拭き始めたとき、この方がどんな方であるのかが一瞬にしてわかりました。

汚れた罪人である自分がイエスのからだに触れても、この方は拒もうとはしません。ことばでは言わなくても、この方が私のことを喜んで受け入れてくださっていることが触れたからだをとおして伝わってきました。自分がどれだけ苦しんできたのかを、この方が一つ一つ丁寧にこぼれた落ち穂を拾うように味わってくださっていることが、触れている手をとおして伝わってきました。

#### 4 信仰があなたを救ったのです

そんなことがイエスとこの女性の間でやりとりされているなど気がつかないでいるパリサイ人たちに、イエスはお語りになります。「『この女の多くの罪や赦されている』とわたしは言います。それは彼女がよけい愛したからです。」「あなたの信仰が、あなたを救ったのです。安心して行きなさい。」

私たちはいつも考えています。『信仰』とは何だろうか。クリスチャンはどのように歩むべきだろうか。こうすれば神が喜ばれるに違いない。今日の箇所で、私たちはイエスが言われる本当の信仰とは何かについて考えさせられます。この女性は、罪深い職業から足を洗ったわけではありません。イエスは主ですと告白したのでもない。ただ黙って涙を流しながらイエスに近づいていただけです。

私たちはどうでしょう。パリサイ人のように、どこかで自分の罪のことを小さなものに考えていなかったでしょうか。一方で神の恵

みは小さいとぼやいていなかったか。

イエスが教えていることは、それとはまったく正反対のことです。自分の罪が大きくて、私は神に近づくことさえできない。そんなふうにして涙を流す者にこそ、主は御顔を向けくださると言うのです。

今日の箇所をもう一度よく見てください。この女性が、イエスのみもとに駆け寄ったのは何がきっかけでしたか。イエスが侮辱されていることがきっかけでした。言い換えれば、イエスはあえて侮辱されることを知りながらシモンの家に行ったのです。そのようにして、この女性がイエスのみもとに来ることができるよう、道を備えてくださっていた。そればかりではない。この方は、御足を差し出し、この足を洗ってくれないだろうか。そんなふうにはりくだって私たちにお願ひしくださる。私たちを救うために、主はこのようなことまでしてくださいませ。

主の御名をあがめたいと思います。